

平成 24 年度 別子銅山に関する本の解説講座「別子銅山を読む」 第 2 回 (2012.07.14)

「別子銅山の近代化を見守った広瀬邸 -旧広瀬邸建造物調査報告書-」

旧広瀬邸文化財調査委員会編集 新居浜市教育委員会発行

平成 14 年 (2002) 3 月 29 日 本文 251 頁 A4 判

1) 作成経緯

- 昭和 43 年(1968) 広瀬公園、愛媛県指定名勝に
昭和 45 年(1970) 広瀬公園、新居浜市に譲渡
昭和 47 年(1972) 広瀬公園の所有者、新居浜市から桃山学院へ変更
昭和 57 年(1982) 市民から旧邸保全の申入れ・・・全面保存困難 (公園等管理委員会)
平成 4 年(1992) 桃山学院短期大学閉校、広瀬歴史資料室オープン
広瀬記念邸建築物調査実施 (愛媛建築士会)
「郷土の歴史的建造物はその地の建築家の手で」
平成 7 年(1995) 広瀬記念邸修理工事
「当初の資材・技法を忠実に踏襲する」「使用可能な資材は極力再利用する」を指針 → 文化財修復の基本原則
平成 9 年(1997) 広瀬歴史記念館開館
平成 13 年(2001) 旧広瀬邸文化財調査委員会設置
・建築経緯を明らかにする
・評価を与える
平成 14 年(2002) 報告書発行
平成 15 年(2003) 重要文化財指定
「別子銅山を支えた実業家の先駆的な近代和風住宅」
①敷地内の建築がほぼすべて残り、改造もほとんどなく、明治中期の大規模和風住宅の姿を今日に伝える遺構として貴重である。
→歴史的価値
②母屋及び新座敷はいずれも数奇屋風の意匠を凝らした上質なつくりで、眺望を意識した部屋を複数持つなど住宅機能のみに留まらず、迎賓館の役割を兼ね備えた構成も特徴的であり、高い価値がある。
→意匠的・技術的価値

2) 調査委員会

後藤治 (工学院大学)、末岡照啓 (住友史料館)、藤繩洲二 (愛媛建築士会)、矢ヶ崎善太郎 (京都工芸繊維大学)、矢谷明也 (舞鶴市)、赤尾恭平 (新居浜市)、久葉裕可

3) 構成と内容

- 第 1 章 概説 (別子近代化遺産における広瀬邸の位置づけと広瀬邸の歴史) [13.5%]
第 2 章 現況調査 (建物及び庭園の現況報告) [8.8%]
第 3 章 修理事業 (平成 4 年～8 年の建築物調査及び修理工事の状況報告) [11.6%]
第 4 章 考察 (近代建築及び近代庭園における広瀬邸の特徴と価値) [10.4%]
図版編 (現状の配置図・平面図・立面図・写真) [17.1%]
史料編 (建設時の図面、古写真、棟札等、文献史料) [32.6% 一文献資料 23.9%—]
年表 [2.8%]
索引 [3.2%]

目 次

口絵

序

凡例

第1章 概説

第1節 広瀬宰平と別子銅山の近代化遺産	1
1 はじめに	1
2 広瀬宰平と別子銅山の近代化	1
3 広瀬宰平と財界活動	2
4 広瀬宰平以後の近代化	3
5 結び - 広瀬と先人が遺した産業遺産	3
第2節 広瀬家と久保田本邸の移転	7
1 新居浜における広瀬家	7
2 久保田本邸の建築	7
3 広瀬家の上原出張所開設	9
4 久保田本邸の上原移転	11
第3節 八木甚兵衛と広瀬邸の建築	12
1 大阪広瀬別邸の建築	12
2 住友鶴谷本邸洋館の建築	13
3 二代目八木甚兵衛の広瀬邸プロデュース	14
4 母屋の改築と新座敷の考案	16
5 新座敷の建築	18
第4節 広瀬邸の竣工と庭園 - 別子開坑200年祭の迎賓館 -	19
1 広瀬邸庭園と周辺の整備	19
2 新座敷の竣工	21
3 別子開坑200年祭と広瀬邸	22
第5節 その後の広瀬邸整備	25
1 宰平古希祝賀会に向けての整備	25
2 鮎香・次郎の結婚に伴う整備	28
3 南庭の拡張整備	29
4 靖献堂と煉瓦書庫の建設	30
5 昭和初期の整備	31
6 その後の広瀬邸と県の名勝指定	32

第2章 現況調査

第1節 敷地と各建造物の概要	35
第2節 木造建造物	37
1 母屋	37
2 新座敷	38
3 料理場	39
4 離れ	39
5 新土蔵・西座敷脇屋	40
6 その他の建物（管理棟、乾蔵、醤油庫、表門、裏門、人力車小屋）	40
7 便器	41
第3節 煉瓦造建造物	42
1 北煉瓦塀	42
2 新土蔵基礎部分	43
3 煉瓦書庫（馨原文庫）	44
4 東煉瓦塀	44
5 西裏煉瓦塀	45
6 南煉瓦塀	46
7 旧水汲み場	46
8 母屋暖炉	47
9 その他	47
第4節 庭園	48
1 内庭	48
2 南庭	50
第5節 移築された西座敷の遺構	55

第3章 修理事業

第1節 事業の経過	57
1 修理までの経緯 57 2 事業の工程 57	
第2節 主要建物の修理	58
1 全体の方針 58 2 母屋 60 3 新座敷 62	
4 料理場 63 5 離れ 64 6 新土蔵・西座敷脇屋 66	
7 乾蔵 66 8 醤油庫 67 9 管理棟 67 10 人力車小屋 68	
第3節 庭園の修理	68
1 はじめに 68 2 庭園整備工事の概要 68	
3 茶室「指月庵」修理工事の概要 70	

第4章 考察

第1節 近代建築における広瀬邸の意義	84
1 近代和風建築評価の視点 84 2 旧広瀬邸の意義と評価 85	
第2節 煉瓦建造物からみた近代建築における広瀬邸の意義	87
1 広瀬邸における煉瓦建造物の概要 87	
2 広瀬邸の煉瓦建造物の意義 88	
3 煉瓦建造物の歴史から見た広瀬邸 89	
4 別子銅山の煉瓦 91 5 広瀬邸の煉瓦建造物の価値 93	
第3節 住友における八木甚兵衛と近代和風建築	93
1 八木甚兵衛の事績と遺構 93 2 八木甚兵衛の和風と広瀬邸 100	
3 近代の大工・八木甚兵衛 102	
第4節 近代庭園の系譜と広瀬邸庭園	104
1 近代の庭園 104 2 広瀬邸庭園の近代性 106	
まとめ	109

図版編

図面（現状）	111
写真（現状）	144

史料編

図面史料	155
写真史料	168
棟札・扁額等	172
文献史料	230
年表	237
索引	244

重要文化財 旧広瀬邸の成り立ち

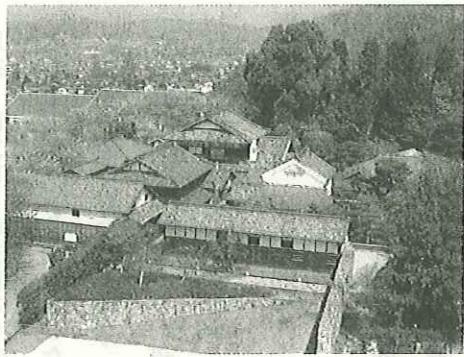
はじめに

平成十五年四月十八日、文化審議会は、旧広瀬邸を重要文化財に指定するよう文部科学大臣に答申、同年五月三十日に官報告示された。

指定の直接のきっかけとなつたのは、旧広瀬邸文化財調査委員会による調査と、報告書『別子銅山の近代化を見守つた旧広瀬邸—旧広瀬邸建物調査報告書』（新居浜市教育委員会、二〇〇二年）の発行であった。これにより、旧広瀬邸に建築史上の評価が与えられたのである。

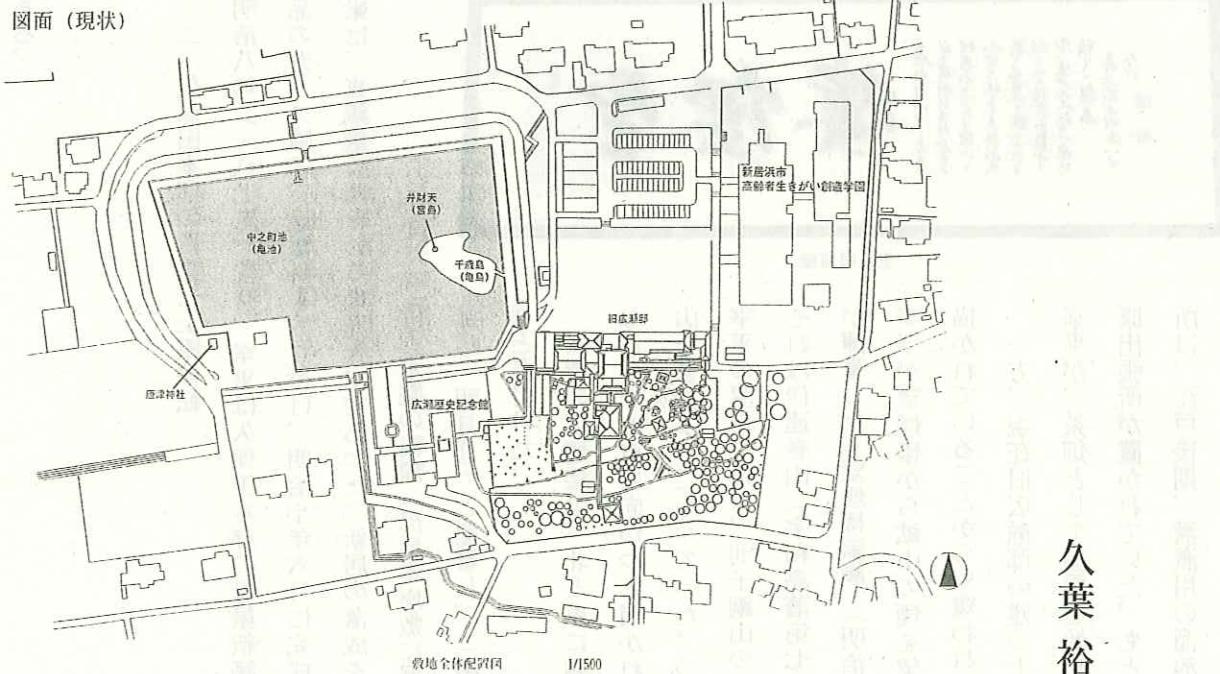
それ以前、旧広瀬邸については、広瀬家関係者による伝承を除けば、建設の経緯はほとんど不明であった。このため今回の調査では、史料による建設経緯の解明に重点が置かれ、報告書の史料編には、建設当時の図面や写真に加え、書状や明細書など、重要な文献史料六十点についても、翻刻のうえ掲載した。これにより、建設経緯について、かなり詳細に明らかにすることことができた。

旧広瀬邸の成り立ちを理解してもらうためには、この報告書をお読みいただくことが最も望ましい。しかし報告書は、発行部数が少なく、内容も専門的であるため、一般への普及という点では難点が



旧広瀬邸全景

久葉 裕可



旧広瀬邸敷地全体配置図

ある。そこで、報告書の内容をもとに、建設とその後の整備の概要をこの誌上で紹介することとした。

なお、報告書の該当部分（第一章概説）の執筆は、明治二十三年の別子開坑二百年祭までを末岡照啓当館名誉館長、それ以後を久葉が担当したものである。

一 広瀬家と久保田本邸

新居浜広瀬家は、宰平の養父、初代義右衛門義泰に始まる。義泰は美濃国安八郡神戸村（現、岐阜県安八郡神戸町）の出身で、別子銅山に勤務、天保九年（一八三八）には、すでに金子村字久保田（現、新居浜市久保田町一丁目）に居住していた。旧広瀬邸内に残る米蔵・金物蔵、乾草の米店支配人を経て引退、住友予州別家となり、金子村に帰農した。安政二年（一八五五）、北脇新右衛門（後の宰平）を養子に向かえ、二代目義右衛門を襲名させ、家督を譲つた。

二代目義右衛門一宰平は、文政十一年（一八二八）、近江国野洲郡八夫村（現滋賀県野洲市）の医者北脇理三郎の次男として生まれた。天保七年（一八三六）九歳の時に別子銅山勤務の叔父北脇治右衛門に伴われて別子銅山に居住、同九年住友家の奉公人となり、勘場（鉱業所本部）に勤務した。慶応元年（一八六五）三八歳で別子銅山支配人となり、幕末・明治の動乱期、政府による接收や住友の經營難による売却から別子銅山を守り、その開発の近代化を推進した。明治十年（一八七七）住友家総理代人（のちの総理事）となり、住友事業発展の基礎を作り上げ

るとともに、わが国産業の育成に力を注ぎ、国家の発展に貢献した人物である。

二 久保田本邸の新築と上原移転

明治八年（一八七五）三月、宰平は久保田本邸の母屋新築に着手、輸入品のガラス障子、避雷針を取り付け、明治十年六月に完成した。大工棟梁は、真鍋儀兵衛という地元大工であつた。新居の落成を喜んだ宰平

は、木製の扁額（母屋本座敷に展示）に「清風送、明月迎」と墨書きし、二階座敷を望煙樓と名付けた。

生煙樓

望煙樓扁額

当時の望煙樓は、北と東に開く現状と異なり、南と東に向かつて開かれて、別子銅山を望むようになつていた。つまり、當時宰平の望んだ煙は、別子銅山の煙であつた。それは伊達春山（宇和島藩第七代藩主宗紀）が揮毫した「望煙樓扁額」（明治十年）にも、宰平が望煙樓から鉱山の煙を望み欲ぶ姿が描かれていることからも窺われる。

一方、現在旧広瀬邸の建つ上原は、当時宰平が、茶畠として開墾を始めており、上原出張所が置かれていた。もともとこの場所は、江戸後期、灌漑用の溜池を造ることを条件に、住友が入手した新田開発用の土

地であつた。しかし新田開発は失敗、その後開墾を申し出た宰平に、明治七年、住友家が贈与したものであつた。

宰平は、事業の本格化にともない、上原への本邸移転を考えるようになる。明治十七年、出張所の建物と製茶工場を新築し、移転の間の家族の住居に充てた。同時に隣接する土地を購入し、新本邸の土地を確保した。

翌十八年には、運搬道の整備や移転準備を進め、上原の新地形にとり

かかつた。移転工事は、翌十九年三月より、別子鉱山土木課技師森金吾の監督の下、開始された。

三 八木甚兵衛の総合プロデュース

移転の進む広瀬邸に、明治十九年（一九八六）七月頃より大阪大工八木甚兵衛（二代目）が、関わり始める。八木は大阪四天王寺の堂宮大工の出で、初代は大阪鰻谷広瀬邸（明治十一年）、同住友本邸洋館（同十二年）を建設、二代目も新居浜口屋（住友分店）の接待館を手がけた住友出入りの大工棟梁であつた。二代目甚兵衛は、この後も大津石山の伊庭貞剛別邸「活機園」和館（国指定重要文化財）や京都鹿ヶ谷の住友別邸（現、住友本邸「有芳園」）など、住友関係の建築に腕を振るうこととなる。

宰平と長男満正は、再三、八木と建築普請の相談を進め、八木は、明

治十九年十一月、職人多数を連れ下向、十二月には、新座敷新築工事の契約を結んだ。新座敷は、明治二十三年の別子開坑二百年祭に際し、迎賓館とするための建物であつた。また、この間宰平は、東京の川田小一

郎邸を見学し、全国の良材の使用、暗渠方式による玉川上水から庭園への引水などの影響を受け、八木へもその実施を指示している。

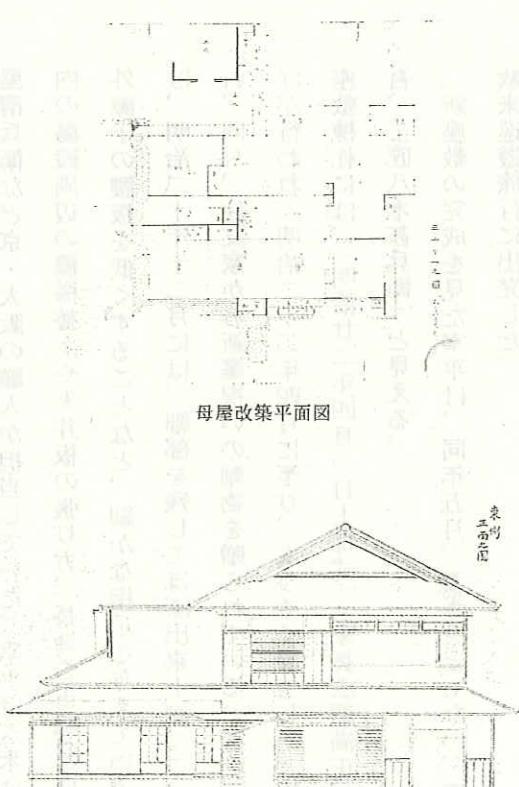
広瀬家文書の中には、このころ八木が作成した広瀬邸配置予定図を始め、多くの建築関係図面が残されている。宰平は、広瀬邸の建設について、八木に総合プロデュースを任せたのである。

四 母屋の改築と新座敷の建設

明治二十年（一八八七）一月には、母屋の移築がほぼ終了した。移築された母屋は、久保田時代の配置から、九十度左回転させ、望煙樓は北と東に向かつて開かれた。ここに、別子銅山を望んだ望煙樓は、風光明媚な瀬戸内海と、これから発展していく新居浜の街を望むこととなつた。

そして宰平の詠んだ「望煙樓」の漢詩は、この広瀬邸があるのも、将来新居浜が工業都市として発展していくのも、その源が別子銅山にあることを忘れてはならないと、子孫を戒めるものとなつた。

母屋改築平面図



母屋改築立面図



新座敷平面図

新座敷立面図

屋清兵衛など京・大阪の職人が担当していた。宰平は八木に、新座敷内の湯殿周辺の模様替えや天井板の張り方、長押を古風の仕上げとし、外障子の腰板を低くすることなど、細かな指示を与えていた。新座敷は、明治二十年十二月には、細部を残してほぼ出来上がつていたと見られ、同月、住友家から新築祝いの軸物を贈られている。その後、総仕上げが行われ、明治二十二年四月に至り、ようやく竣工した。現存する新座敷棟札には、「明治廿二年四月一日上棟式」「家長廣瀬満正、監督森金吾、工匠八木甚兵衛」と見える。

新座敷の完成を見た宰平は、同年五月、妻幸をともない、還暦祝いの歐米巡遊旅行に出発した。

五 別子開坑二百年祭と広瀬邸

広瀬邸の整備は、新座敷の完成を以て一段落した。しかし、翌明治二十三年（一八九〇）五月の別子開坑二百年祭に、住友家当主を迎える迎賓館としての体裁を整えるため、その後も整備が続けられた。

正、八木の間で頻繁にやり取りが行われた。その結果、八木が、総合配置図や母屋・新座敷の平面図・立面図などを作成、それに基づいて、母屋居間の暖炉や玄関脇の雪隠の設置、縁廻りの改造などが行われた。さらに宰平は、高台にある母屋の落雷予防のため、避雷針取り付けを指示、その取り付け方法は、別子鉱山の工師岩佐巖（ドイツ工学士）に聞くよう指示している。

一方、新座敷とその周辺の整備は、大工・八木一門の他、建具師・横山安兵衛（川安）、表具師・菅野平助、金具師・中川淨益、庭師・植木

翌二十三年二月からは、表門・門番所の建築に着手、四月には庭園の手入れが始められ、賓客を迎える準備が整えられた。

五月二十九日、別子開坑二百

年祭に出席するため、住友吉左

衛門友忠一行が新居浜に到着、

広瀬邸を宿所とした。この時、

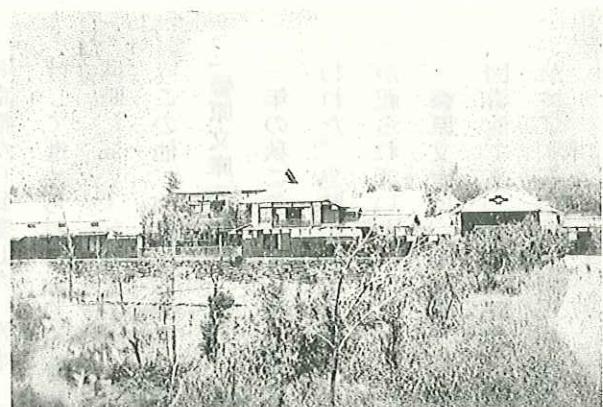
大阪の写真師若林耕七が二百年祭撮影のために同行、竣工間もない広瀬邸を撮影した。今日よく見る広瀬邸古写真は、この時撮影されたものである。

なお、この時広瀬邸がどのよ

うに使われたかは明らかでない

が、三年後の明治二十五年十月、

十五代吉左衛門襲名を控えた住友隆磨（友純）が、初の別子視察を行つた際の宿泊記録が参考となる。この時、新座敷は隆磨の休息室兼寝室、謁見の間に充てられ、望煙楼は理事以上の随行員の休息室兼寝室、指翠樓や本座敷などは、その他の随行員の休息室兼寝室に充てられた。また、表門から各部屋部屋、庭園にいたるまで、様々なしつらいが施されたが、これについては、本号掲載の畠智子氏による「御来邸之紀」にみる広瀬邸のしつらい」を参照いただきたい。



広瀬邸 明治23年撮影

壇は、北側、南側（現、内庭南側にあつたが現存せず）、東側は既に完成していたとみられるが、西裏煉瓦壇は、明治二十四年（一八九二）に建設されている。

また同年には、亀池の改修工事も行われ、石積が施されるとともに、中之島（千歳島）の築造も始まつた。その後亀池は、水漏れのため、明治三十年に石積前面に土留め用の石積を行い、現在見るような二段の石積となり、池畔の周回路もできた。さらに翌三十一年には千歳島に銅製の弁財天像が据えられた。こうした亀池の整備は、宰平の古稀記念祝賀会（三十一年十月）に合わせて行われたようで、当日は亀池のほとりに宴会場が設けられ、模擬店や小舟遊興などで賑わつた。

一方、屋敷内においても、祝賀会に合わせて母屋望煙楼への階段を改造、座敷・居間二方向から上がるるものとし、意匠も凝らした。

明治三十三年五月、満正長女艶香と瓢池園（輸出用陶磁器の上絵付け工場）創立者の河原徳立次男、次郎が結婚、次郎が婿養子として広瀬家に入籍した。広瀬邸では、若夫婦の新婚生活に備え、この前後から蔵の整理や台所修築を行つていたが、最も大きな整備は、明治三十五年頃と思われる料理場の建設である。建築当初より、これよりも小規模な料理場は存在したが、結婚を機に、八木甚兵衛の手による大規模なものに建て替えられたようである。

六 亀池整備と料理場建設

開坑二百年祭により、一応の完成を見た広瀬邸であつたが、周辺整備はその後も引き続き行われた。当初より屋敷を回らす予定であつた煉瓦

七 南庭の拡張整備

竣工当時の広瀬邸の敷地には、現在の南庭（倘洋園）部分は含まれていなかつた。もともと屋敷地と現南庭の間には道が通つており、南への

拡張は難しく、新座敷建設時にも問題となつた。しかし、新道を南に建設し（現、旧邸南側道路）、その土地を広瀬が提供することで旧道部分の払い下げを受けることになり（明治三十九年一一九〇六一）、南への拡張が可能となつた。



広瀬家山田墓地

南庭の整備が本格化するのは、大正時代に入つてのことである。新しい南側煉瓦塀建設が始まり、邸内となつた旧道沿いの煉瓦塀が取り壊された。煉瓦塀建設は大正六年（一九一七）頃まで続いているが、大正五年には、南庭内の広脇神社が新築され、狛犬や十三重石塔（現存せず）も京都から到着した。なお、これに合わせて広瀬家山田墓地の整備も並行して進められており、広徳院殿（義泰）、広照院殿（宰平）の石碑も同時に届いている。

この他、南庭に設けられた主な施設は、持仏堂「靖献堂」、煉瓦書庫「馨原文庫」、茶室「虚室」（現存せず）などである。靖献堂は、大正十一年の秋ころまでには外郭が完成していたが、十三年四月に開堂式が行われた。当時の靖献堂内部は、正面に天皇家、左に住友家、右に広瀬家が祀られていた。

馨原文庫は、地域住民の学習機会を増やすために、満正が作った私設図書館であった。大正十二年ころには外郭がほぼ完成したが、内装工事が終了するのは、満正が没する前年の昭和二年（一九二七）である。

昭和に入り、新土蔵の大規模改修工事（昭和五年一一九三〇一）、醤油庫の建設（同六年）、靖献堂の改築（同八年）などが行われたが、これをもつて、広瀬家による主要な整備は終了した。

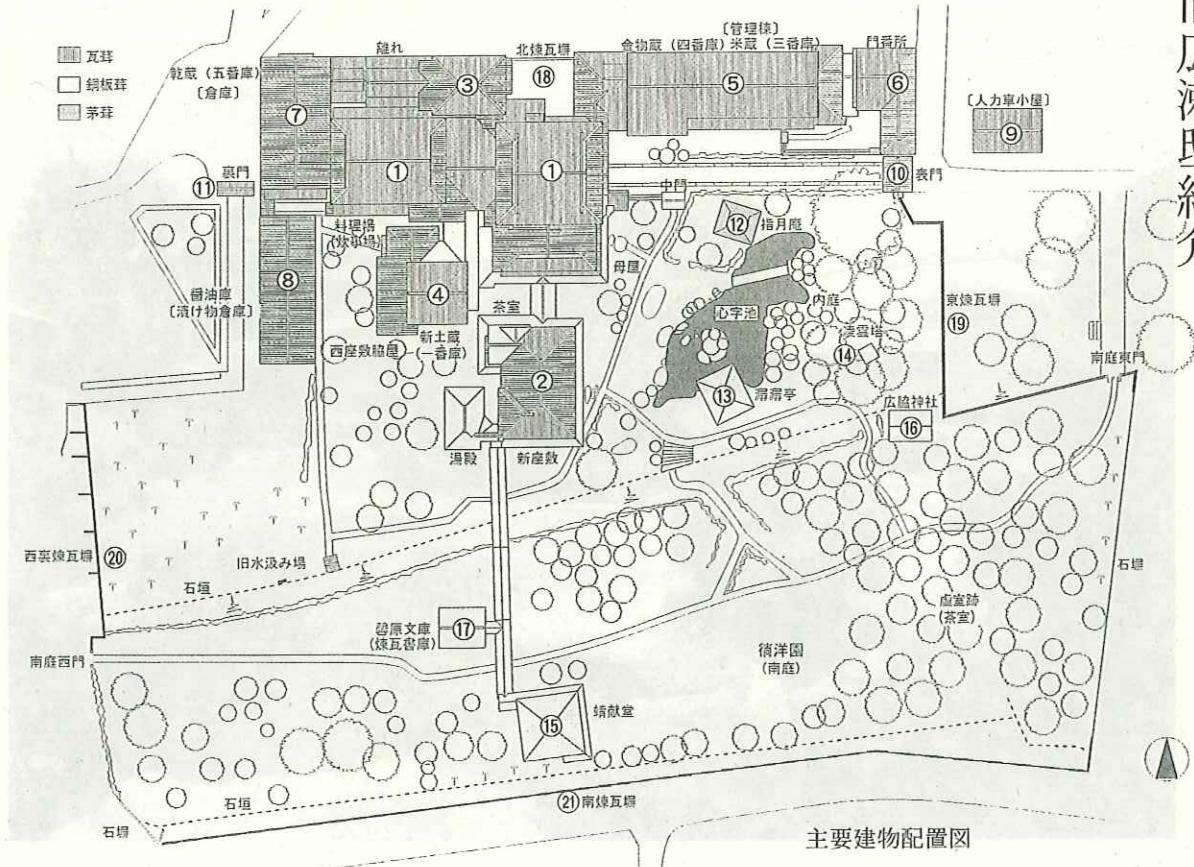
次郎は、結婚当初この屋敷に常住したのを始め、新居郡立新居農学校校長や中秋村村長を歴任し、この地域とのつながりが強かつたものの、東京高等蚕糸学校教授や農商務省蚕糸試験場技師など東京での活動も多く、明治末には、一家の生活の場は東京に移された。

しかし、広瀬邸は、広瀬家の地元事業の中心に位置していたこと、別子開坑二百年祭以後も別子銅山巡見者の接待館的な役割を持ち続けていたことから、その後も本邸として維持され続けた。住友友純とその家族は、宰平引退以後も、別子巡視のおりには、たびたび宿泊しているし、松方正義（明治二十六年）、西園寺公望（二十九年）など明治の元勲たちも訪れている。

こうして広瀬邸は、その後も大きな改造の手が加えられることなく維持され、昭和四十三年三月には、「明治期に構築された姿がそのまま現存する貴重な邸宅跡」として、愛媛県の名勝に指定された。そして昭和四十五年、亀池を含む広瀬邸一帯は、広瀬家から新居浜市へ譲渡されることとなり、ここに広瀬本邸としての役割を終え、市民共有の文化財となつた。しかし、別子近代化の精神的支柱として、あるいは別子（近代化遺産）を訪れる人たちの接待館としての役割は、今も変わらず持ち続けている。

（広瀬歴史記念館 館長）

旧広瀬邸紹介



主要建物配置図

①母屋（重要文化財、内部公開）
明治十年に市内久保田に建てた母屋を、明治三十年代以前の建築。

⑨人力車小屋（附指定）
明治三十年代以前の建築。

明治二十年に現在地に移築した。西側に明治三十五年頃増築の料理場を設ける。二階「望煙樓」は、宰平の漢詩にちなんだ。北と東向きの縁手掘りに洋風意匠を用いるほか、洋式便器、暖炉、避雷針など実用面で洋風の導入が見られる。

②新座敷（重要文化財、内部公開）
別子開坑二百年祭の接待館として、明治二十二年に建築された。住友出入りの大工棟梁八木甚兵衛の手による。十五畳敷きの新座敷、十畳の次の間、北西に茶室、南西に廊下を介して湯殿・雪隠を設ける。座敷には、上段風の床と琵琶床を備え、内法長押を廻して欄間、釘隠等に意匠を凝らす。

③離れ（重要文化財）
明治二十二年に移築された。一階は釜屋、風呂場などが附属し、二階は縁と床を備え、「指翠樓」や隠し部屋などがある。

④新土蔵・西座敷脇屋（附指定）
明治二十一年の竣工であるが、昭和初期に大規模な改修工事が行われた。西座敷は戦後西条市に移築された。

⑤金物蔵・米蔵（重要文化財）
明治二十年に久保田より移築。江戸時代末の建築で、米蔵には天保十年の祈祷札が残されている。一部を事務所として使用。

⑥門番所（重要文化財）
明治二十三年に久保田時代の「御部屋」（宰平の養母の部屋）を移築したもの。

⑦乾蔵（重要文化財）
明治二十年に久保田から移築された納屋跡。

⑧醤油庫
昭和六年、久保田から移築された納屋跡。

⑨人力車小屋（附指定）
明治二十三年以前の建築。

⑩表門（重要文化財）
明治二十三年頃の建築。

⑪裏門（附指定）
明治二十三年以前の建築。

⑫指月庵
明治二十一年竣工の茶室。命名は遠藤石山。

⑬瀧瀧亭
東屋。明治二十三年頃竣工。

⑭凌雲塔
山の銅で、大阪で制作。銘文は遠藤石山。

⑮靖献堂
明治二十年竣工の銅製三重の塔。別子銅山に合祀されていた。

⑯広瀬脇神社
大正五年建設。もとは龜池南西岸の唐津神社に合祀されていた。

⑰煉瓦書庫（警原文庫）
大正十二年に外郭竣工。読書を奨励した

⑲北煉瓦堀
明治二十三年以前の竣工。透かしの意匠を持つ。

⑳東煉瓦堀
明治二十四年頃竣工。

㉑南煉瓦堀
明治二十四年頃竣工。

㉒西裏煉瓦堀
明治二十四年頃竣工。

㉓水汲み場
明治二十三年頃竣工。

㉔薪庫
明治二十四年頃竣工。

㉕石垣
明治二十四年頃竣工。

㉖南庭
明治二十四年頃竣工。

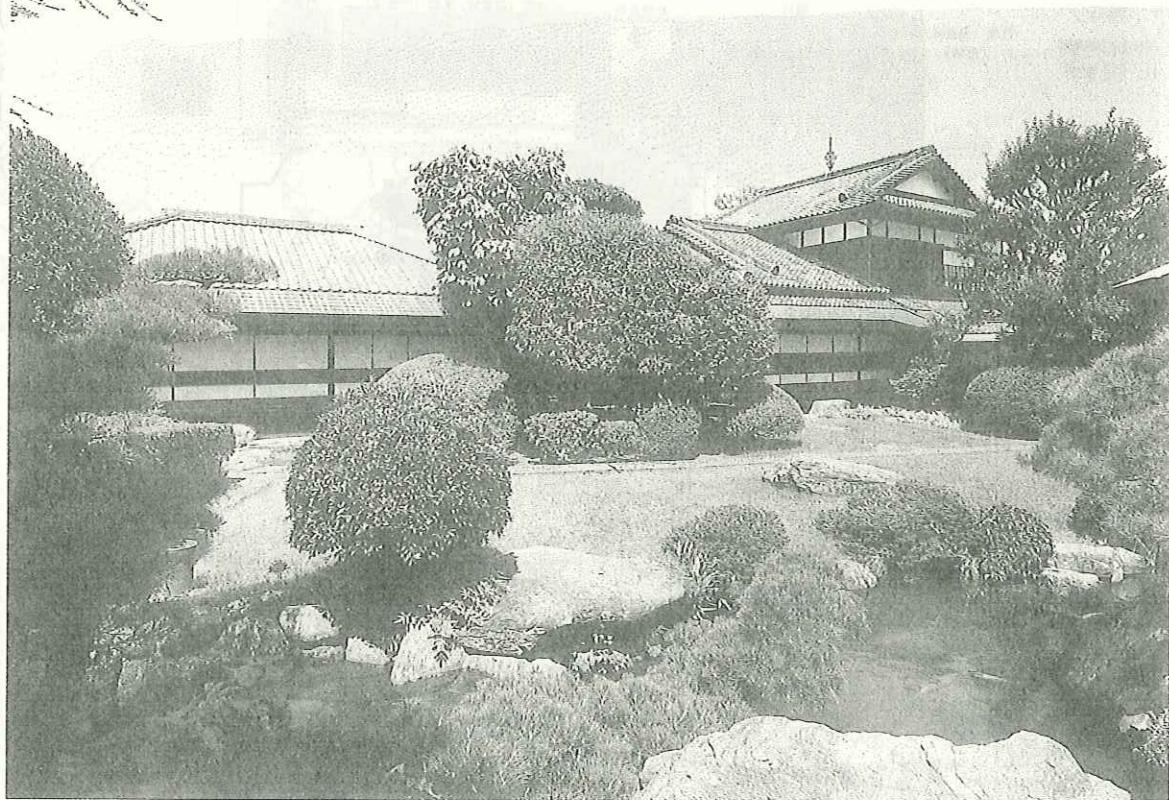
㉗北庭
明治二十四年頃竣工。

㉘茶室
明治二十四年頃竣工。

㉙新座敷
明治二十四年頃竣工。

㉚離れ
明治二十四年頃竣工。

内庭から見た母屋（右）・新座敷



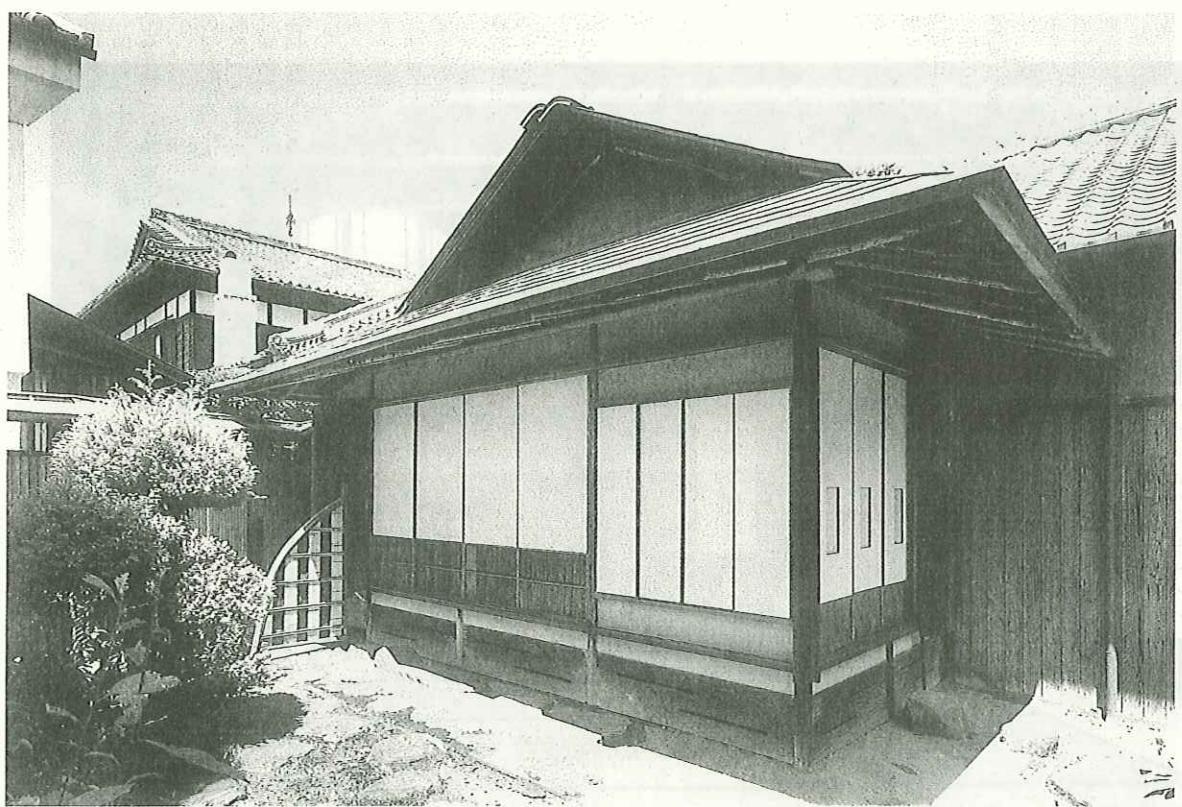
母屋正面



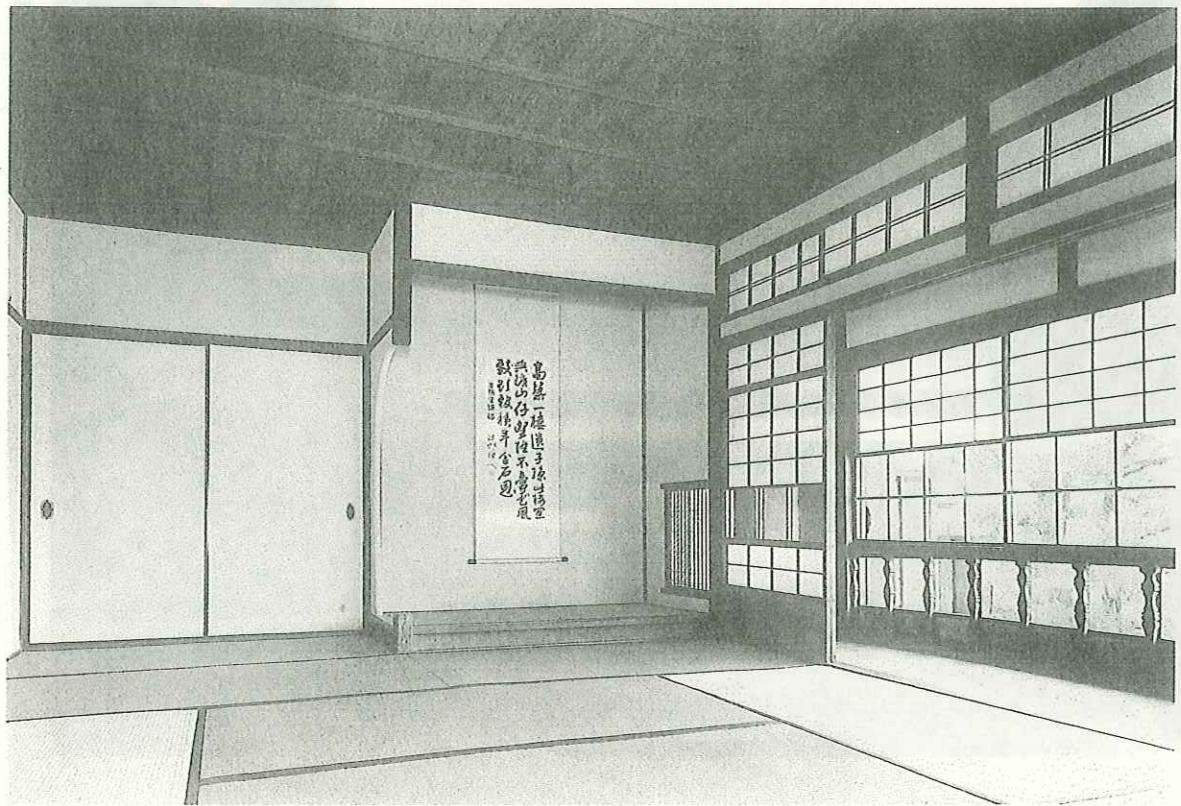
新座敷正面



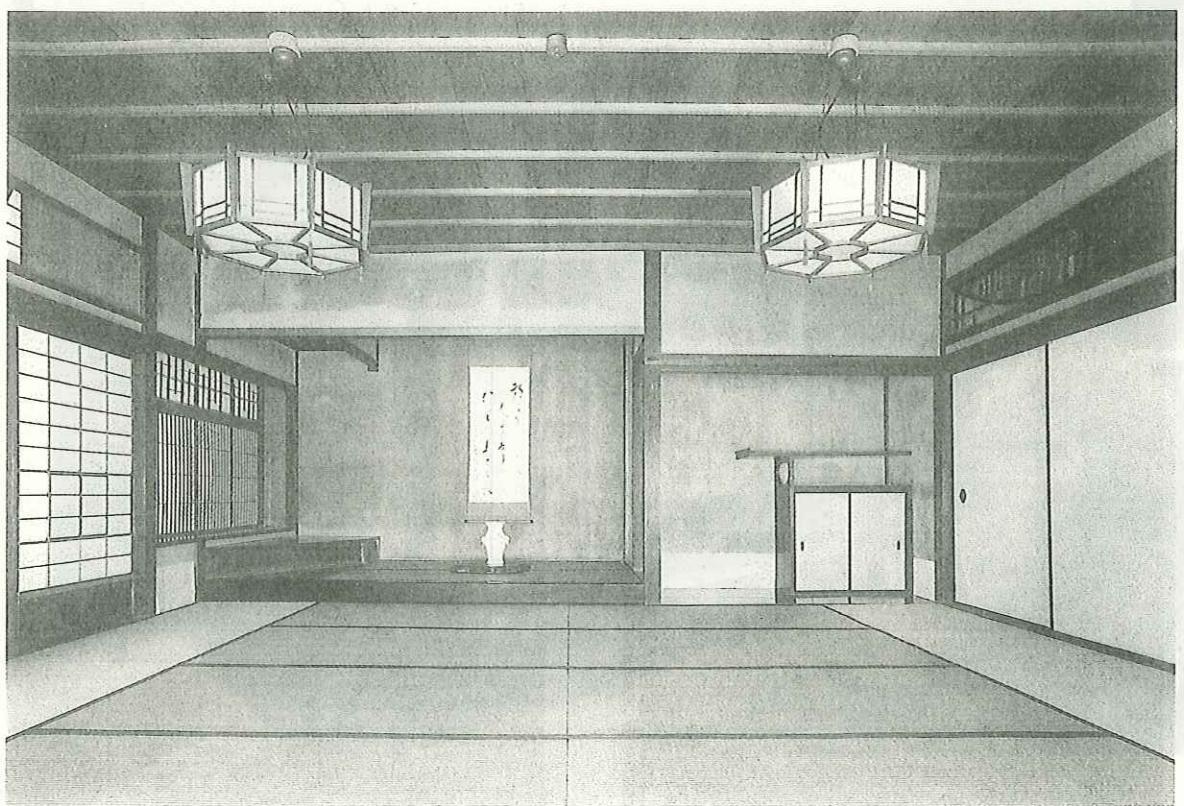
新座敷茶室



母屋二階望煙樓



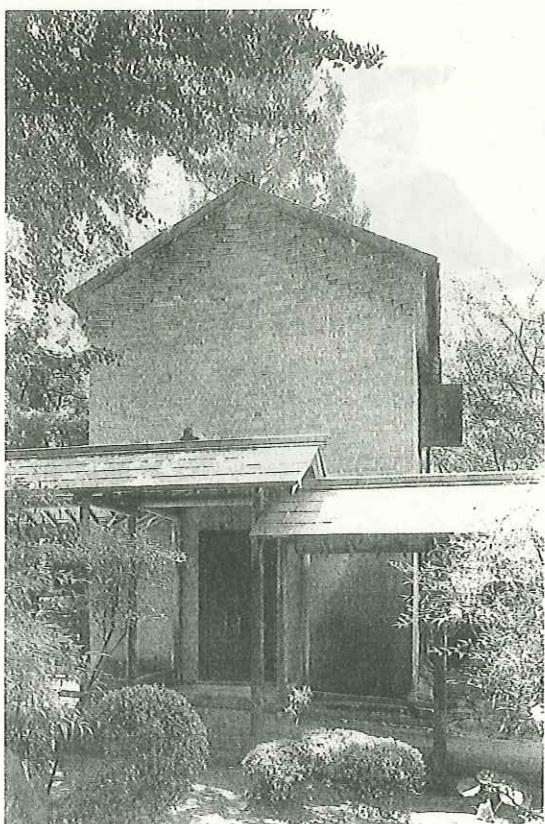
新座敷内部



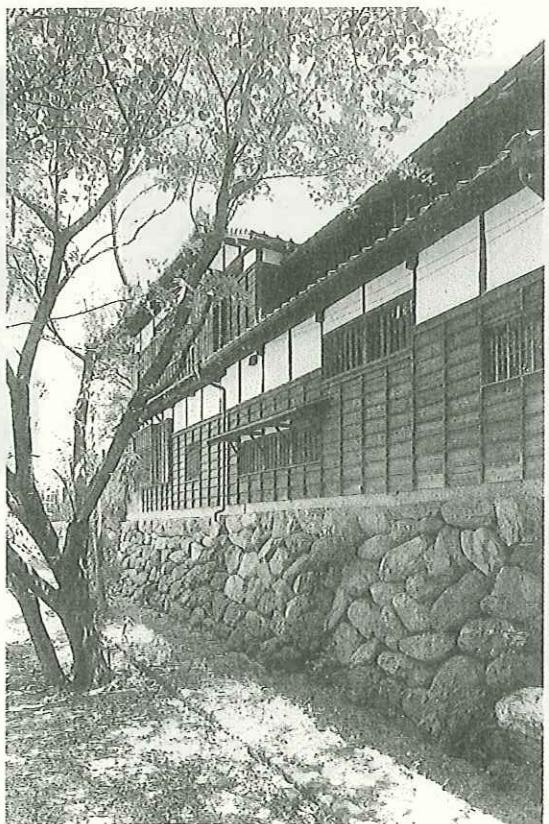
靖獻堂



馨原文庫



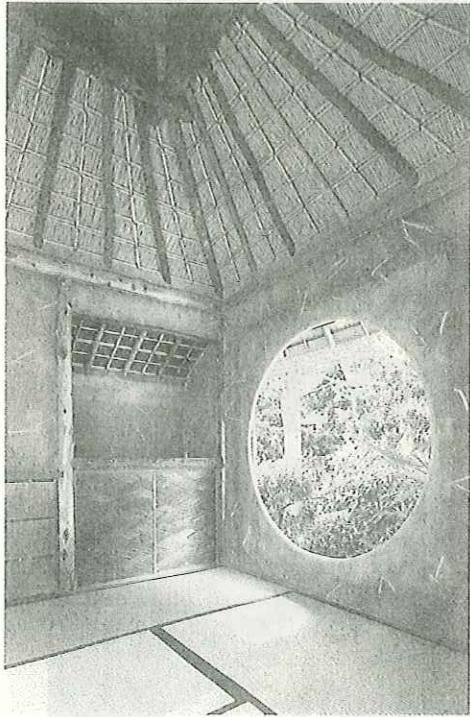
離れ



内庭と潺潺亭



指月庵内部



指月庵



(撮影 小野吉彦)

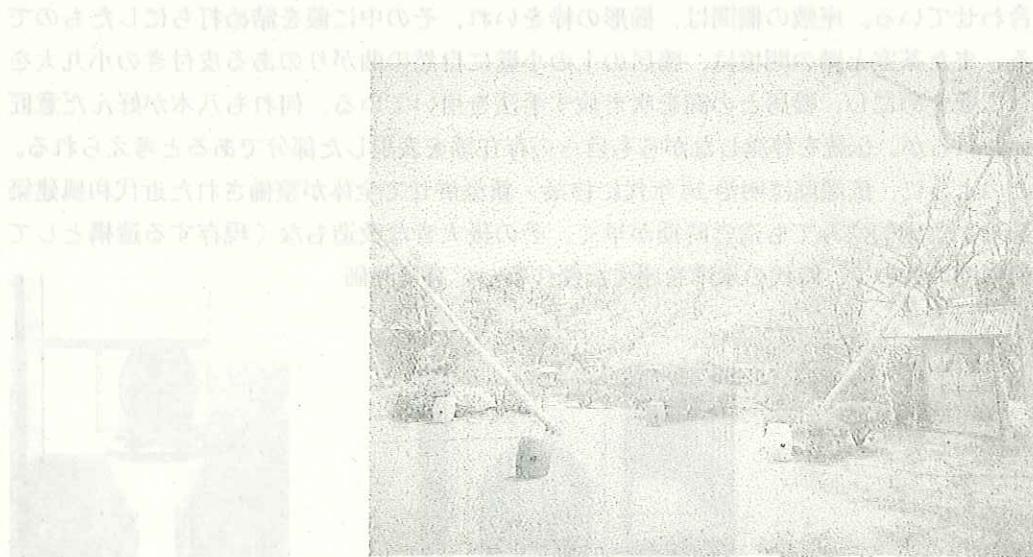
広瀬邸庭園

前編 第二回

旧広瀬邸内にある内庭は、明治22年（1889）大阪の庭師・植木屋清兵衛によって作られたものである。中島をもつ心字池を中心にして、母屋および新座敷の東に広がり、西側新座敷前を芝生の平庭とし、東から南にかけて築山が築かれている。池の北寄りには茶室「指月庵」（明治21年竣工）が建ち、南の端には東屋「潺潺亭」（明治23年頃竣工）、東側の築山頂上には、銅製三重の塔「凌雲塔」（明治20年竣工）が建つ。指月庵の命名と凌雲塔の銘文は、広瀬家と交流の深かった郷土の儒者遠藤石山によるものである。

心字池は、邸宅の東を流れる小川から暗渠によって引水されたもので、宰平の親友川田小一郎邸の庭園からヒントを得たものである。近代庭園の持つ自然観は、煎茶のそれに大きく影響を受けたと考えられる。それは、自然そのものをありのままに表現する、開放的で自由な自然観であり、なかでも水の扱いには特別な配慮がなされた。内庭に導かれた滝流れの水は、石の間を渓流となって心字池に流れ込む。四方を開放し、軽快なつくりの潺潺亭は、その渓流のかたわらにたたずんでおり、足下を流れる水の音を楽しみながら、風流なひと時を過ごすことができたであろう。新座敷から眺める潺潺亭の姿は、まさに山間深く樹間を走る清流のかたわらに建つ瀟洒な茶屋の情景であり、それこそ近代の自然観を反映した庭と建築のあり方そのものである。

内庭北方に建つ指月庵は、入口に明障子を4枚建て、東面には大きな円窓を開けており、きわめて鄙びた構えながら、明るく開放的な茶室の雰囲気を持っている。これは通例の草庵茶室とは異なる自由な発想から生まれたもので、茶屋あるいは茶亭と呼ばれる遊興のための建築にふさわしい構えである。ここでは、南に広がる内庭と一体となった風流な遊びが意図されたものであろう。宰平は庭に向かって南面し、陽光をふんだんに取り入れたこの茶室を絶賛している。宰平の趣味と教養を反映したこの庭園と付属の建築のあり方は、形式にとらわれない自由な茶、あるいは庭園と建築とが一体となった風流な遊びを可能とするものであり、ここにも近代の庭園に求められた自然観が見てとれる。座敷からの鑑賞においても、あるいは遊興空間としての利用においても、庭園と茶亭あるいは東屋といった庭園建築が一体となり、ひとつの理想郷を具現化したものといえる。



新座敷から見た内庭（若林耕七 明治23年5月）

近代和風建築 広瀬邸

（株）アーバンデザイン事務所・顧問の鶴太（88歳） 単立者用、お部屋内にある二軒の便所

近代—幕末から昭和戦前—において、近世以来の伝統的建築技術を継承しながらも、時代の要求である近代性を取り入れて建設された建築が、近代和風建築である。

広瀬邸の建築において、近代的特徴としてまず目に付くのは、二階建てであることと、ガラス障子や暖炉など、実用を重視した設備面である。明治8年（1875）、宰平は久保田本邸の母屋新築に際し、すでに別子銅山を望む二階建ての建築を構想しており、高くなつた屋根に避雷針を立てたのも宰平らしいアイデアであった。また、同時に導入されたガラス障子は、板ガラスが国内で生産されていない当時にあっては、当然高価なものであったが、住宅としての実用を重視して、必要な所に積極的に取り入れるところに、宰平の進取性がうかがえる。

暖炉と洋式便器（イギリス、TWYFORDS社製）の採用は、上原への移築に際して導入されたものであるが、畳敷きの和室に暖炉が置かれたことが、宰平ならではの実用的な工夫であったし、二階の洋式便器の採用も日本における初期の事例と考えられる。こうした設備面での新規性は、史料によるといずれも宰平の指示によるものであることがわかる。広瀬邸の近代性は、財界人として常に先を見据えた宰平自身の性格によるところが大きく、それに応えることで、大工八木甚兵衛も、近代性を身につける契機を得ていたといえる。

また、広瀬邸には近代的な要素として洋風的な意匠を見ることができる。母屋二階望煙楼のベランダ風縁側と手摺り、そして二階に上がる階段などである。望煙楼は、当初洋館のベランダに似た、吹きさらしであったと考えられ、手摺りの意匠も擬洋風である。階段は、宰平の古稀記念祝賀会に併せて明治31年に付け替えられたものであるが、二方向からあがれる西洋風の堂々としたものとなっている。

明治22年新築の新座敷は、数寄屋に書院造り風を加味したものである。近代和風建築の一典型を示す作品といわれるが、意匠で特に注目されるのは、床まわりと欄間である。床は間口二間ほどもある大きなもので、左に低く琵琶台を設け、床脇には棚と地袋を組み合わせている。座敷の欄間は、櫛形の枠をいれ、その中に葭を詰め打ちしたものである。また茶室と鞘の間境は、鳴居の上の小壁に自然の曲がりのある皮付きの小丸太を渡して壁止めにし、鳴居との間を吹き放す手法を用いている。何れも八木が好んだ意匠といわれるが、伝統を尊重しながらも自らの存在感を表現した部分であると考えられる。

このように、広瀬邸は明治20年代に移築・新築併せて全体が整備された近代和風建築であり、全国的にみても造営時期が早く、その後大きな改造もなく現存する遺構としては最初期のもので、時代の水準を超えた優作として高く評価されている。

